

中学生の社会的行動についての研究 (106)

—「いじめをしたこと」「いじめをうけたこと」の縦断的变化—

○二宮克美 (愛知学院大学)
五十嵐 敦 (福島大学)
山本ちか (名古屋文理大学短期大学部)

氏家達夫 (名古屋大学)
井上裕光 (千葉県立保健医療大学)

キーワード：中学生、いじめ、親子

問題と目的

「児童・生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文部科学省発表、平成17～25年度)によれば、「いじめ」は中学1年生で発生認知件数がピークとなっている。また男女別では、男子に多くみられている。

本研究では、中学1年生、2年生、3年生の3時点で、「いじめをしたこと」(加害経験)と「いじめをうけたこと」(被害経験)をたずねた。これらの経験に関する中学生の縦断的な変化について、主たる結果を報告する。

同時期に、父親と母親それぞれ別々に、自分の子どもの「いじめ」「いじめられ」の認知もたずねた。父母子3者の縦断データがそろっている結果についても報告する。

方 法

＜調査協力者＞ 1. 中学生の縦断データ：愛知県内と福島県内の中学生で、次の3時点の縦断的調査にすべて回答した生徒。時点1は中学1年2学期(2002年9月)、時点2は中学2年2学期(2003年9月)、時点3は中学3年2学期(2004年9月)。男子222名、女子299名の合計521名。

2. 父母子(中学生)3者そろった縦断データ：上記の者のうち、同時期に父親と母親がそろって調査に協力してくれた203組(子どもが男子97組、女子106組)。

＜調査項目＞ 1. 中学生への質問項目：「ふだんの行動についてお聞きします。この3ヶ月間に、次のような行動をどのくらいしましたか。あてはまる数字に1つ○をつけてください。」と教示し、全60項目をたずねた。その中に、次の2つの質問項目がある。1.「いじめをしたこと」、2.「いじめをうけたこと」。選択肢は「何度もあった」「数回あった」「一度だけあった」「一度もなかった」の4件法。今回の分析では、「あった」と「なかった」の2件法に回答を変換し用いた。

2. 父親・母親への質問項目：「あなたは、お子さんが次のような行動をこの3ヶ月間に、どの程度していると思いますか。あてはまる数字に1つ○をつけてください。わからない場合、判断できない場合は*に○をつけてください」と教示し、全43項目をたずねた。その中に、次の2つの質問項目がある。1.「いじめに加わったこと」、2.「いじめをうけたこと」。選択肢は「何度もある(と思う)」「数回ある(と思う)」「一度くらいはある」「そんなことはしていない」「わからない」の5件法。

今回の分析では、「あった」と「なかった」「わからない」の3件法に回答を変換し用いた。

結果と考察

1. 中学生の縦断データ：

(1) いじめをしたこと(加害経験) 3時点ともに「なし」と回答した者が381名(73.1%)で最も多く、男子は146名(65.8%)、女子は235名(78.6%)で、女子の方がいじめ加害経験の割合が少ないと言える。逆に3時点で一貫して「あり」と回答した者は9名(男子8名、女子1名)(1.7%)いた。3時点の変化パターンで一番多くみられたのは、中1(あり)⇒中2(なし)⇒中3(なし)で、43名(8.3%)であった。その内訳は男子17名(7.7%)、女子26名(8.7%)であった。

(2) いじめをうけたこと(被害経験) 3時点ともに「なし」と回答した者が387名(74.3%)で最も多く、男子は157名(70.7%)、女子は230名(76.9%)であった。逆に3時点で一貫して「あり」と回答した者は12名(男子8名、女子4名)(2.3%)いた。3時点の変化パターンで一番多くみられたのは、中1(あり)⇒中2(なし)⇒中3(なし)で、52名(10.0%)であった。内訳は男子18名(8.1%)、女子34名(11.4%)であった。

上記の「いじめ」の縦断データに関する結果から、中学1年生で「いじめ」の加害・被害経験が多いことが裏付けられたと言える。

2. 父母子(中学生)3者そろった縦断データ：

(1) いじめをしたこと(加害経験) 3者が3時点とともに「なし」と回答している組が多く、時点1で145組(71.4%)、時点2で110組(54.2%)、時点3で126組(62.1%)であった。続いて、子「なし」父「わからない」母「なし」のパターンが多く、時点1で15組(7.4%)、時点2で28組(13.8%)、時点3で27組(13.3%)であった。父親は、子どものいじめ経験に「わからない」と回答するケースが多かった。

(2) いじめをうけたこと(被害経験) 3者が3時点とともに「なし」と回答している組が多く、時点1で82組(40.4%)、時点2で87組(42.9%)、時点3で94組(46.3%)であった。加害経験と同様、父親の「わからない」と回答するケースが次に続いている。3者ともに「あり」と回答している組は、時点1で11組(5.4%)、時点2で7組(3.4%)、時点3で5組(2.5%)であった。子どもの「いじめ」(被害経験)を両親がともに認知しているのも、中学1年生の時期であると言える。